

モンゴル相撲の基層をなす「身体」イメージの復活

松田 邦子

A Study on Revival of "Body" Image in Foundation of Mongolian Style Wrestling

Kuniko MATSUDA

1. はじめに

デカルト以来、身体の問題が語られて久しいが、最近とみにさかんであると感じられる。これは心身二元論を前提とした西洋哲学へのアンチテーゼであり、それを越えた思想への模索がなされていることを物語るものであろう。

文化人類学の研究で、身体文化を取り上げた研究では、まず、野村雅一の仕事が挙げられる。野村は『しぐさの世界——身体表現の民族学』¹⁾などにより、身ぶりや姿勢など生活のなかの身体を観察し、生の本質ともいべき身体性について言及している。

また菅原和孝は、『身体の人類学』²⁾において、ボツワナ共和国の狩猟採集民「グウィ」の日常行動に注目し、彼らが直接的に身体を交わらせてコミュニケーションをとっている場面を取り上げることで、彼らの社会を了承し直すことを試みている。

こうした先行研究は、「身体」を社会・文化的コンテクストに位置付け、「身体」を文化を読み解く糸口とした点で、非常に示唆に富み魅力的な研究である。しかし、「身体」という文化的な多様性を考えたときに、日常生活の身体技法のみでは、計り知れない「身体」が浮かび上がってくるはずである。いわゆる、生業に直接結び付くことなしに、動くことがすなわち「快楽」に結び付く自己目的的身体、これがなおざりにされていると感じずにはいられない。そこで本論では、身体を探求する糸口として、「スポーツをする身体」を提出したいと考える。身体の動きから「快」という意識へ、「快」という意識から身体の動きへ円環する「スポーツ」は、心と身体を乖離しては考えられないものであるはずであり、これこそが先に述べた心身二元論の克服の一端を担うものではないのか、と筆者は考えるからである。

そこで本論では、モンゴル国の相撲を取り上げ、それをを行うボフ (bex=モンゴル相撲力士) の身体に着目することにする。モンゴル国において、相撲という格闘技は、他のスポーツと比較しても、圧倒的な人気をほこる。他国の者からすると、競馬が最もモンゴルらしいと感じるようであるが、モンゴルの人々にとって、相撲は特別なスポーツである。当然、それを担うボフは、国民の英雄であるが、特に優勝ボフは、現代版チンギス・ハーンと言っても過言ではない。この国民の英雄たるボフの身体は、後で詳しく述べるが、スキルを競う競技する身体と表現する身体を合わせ持つ。その「表現」は、文化の文脈において経験の共同性が前提にあるはずであるし、また「スキル」自体も、その獲得の方法も、

それを行う身体のおかれる文化・社会によって異なるものであろう。そうした意味において、モンゴルにおいて「ボフ」の身体はどのように捉えられ、受け入れられているのか、また、どのようなイメージが与えられ理解されているのか、を当該文化の文脈に沿って理解するのが本論の目的である。

ここで一言断っておかなければならない。本論では、モンゴル国で行われる格闘技を、「モンゴル相撲」と呼んでいる。しかし実際のところ、モンゴル語ではこの競技自体を呼びならわす言葉が存在しない。力士という意味の「ボフ」という言葉はあるのだが、格闘技自体を表す単語は存在しない。強いて挙げれば「力士が組み合うこと」という意味で「ブヒーン・バリルダーン (бөхийн барилдаан)」という言葉が存在するくらいである。このモンゴルで行われている格闘技を、現地の言葉で言い表すことが、日本の「相撲」との混同を招かず適切であるのだが、上記のように言葉が存在しないので、日本において周知の名称として通じる「モンゴル相撲」と表記することとする。

本論ではまず、ボフの「理想の身体」に関する認識を明らかにし、ボフの身体技術である「技」と「技」以外のボフの表現的な動作について触れる。次に、ボフの身体に与えられるイメージについて述べ、そのイメージのひとつである、想像上の鳥「ハンガルディー」について特に取り上げる。そして、その「ハンガルディー」とイメージされるボフの身体性について考察することにする。

2. モンゴル相撲の身体動作

2. 1. ボフの「身体」の伝承性と経験

理想的なボフの条件について、1996年夏季の調査において、インタビューを試みた³⁾。それによると、まず、①力持ちであるということ、②動作が機敏であること、③体が大きく、胸が厚く、首が太いこと、である。

これらの、特質はもともと「血の中に入ったもの」と考えられている。つまり、優れたボフは練習で培われるものではなく、生まれながらの素質に負うところが大きいということである。実際、高名なボフには、祖父や父などの血縁に有名なボフが多いと言う。つまりボフの理想的な身体には、伝承性と反復性が意識されてきたのである。

しかし、素質が第一条件ではあっても、何らかのトレーニングは必要だとも考えられている。ナーダムのような大きな大会の前には、一カ月ほどまえからボフ達は、ウランバートルの市街地から離れて、川のほとりの草原などで合宿を行う。モンゴルのボフは、いわゆるアマチュアの選手で他に仕事をもっているのだが、職場を長期に休んで練習をするのである。特に最近では、そのトレーニングにサッカーやバスケットボールなどの近代スポーツを取り入れ、俊敏性を養っている。もちろん、試合さながらの相撲の取り組みげいこも行う。

こうしたトレーニングは、完全に体が成長しきらない前に行ってはならないというのが、ボフの常識になっている。幼くして体格に恵まれていても、体が十分に成長するまでは、積極的なトレーニングは避けるべきだと考えられている。

1996年の調査でインタビューを行ったソソルバランという名のボフは、そうした意味で、ボフとしてもっとも理想的な成長を遂げた一人といえよう。彼は、幼いころ体が小さく、

「子犬」というあだ名で呼ばれていたほどであった。しかし、一方で「骨が重い」体をしてきたと両親はいう。その後16歳になり、夏休みに牧畜作業の手伝いをしたことにより、体ができあがった。特に、羊や馬に水を飲ませるために水を井戸からくみ出す作業で、胸が厚くなったという。それから2年後に彼は地方のナーダムで相撲をとり、正式にボフの仲間入りを果たすのである。そうして彼は、その強靱な胸の力を生かした技で、25歳のときにアルスラン（獅子）という称号を受けるほどの国民的なボフに成長し、60歳になる現在でも現役で相撲を続けている。

このようなボフの肉体に関する考え方、すなわち遺伝によってボフにふさわしい身体が備わり、体が成長するまでは積極的なトレーニングを行わないという常識は、駿馬を育てる技術と同様であるとモンゴルでは言われている。モンゴルにおいては、駿馬はオヤチ（*уяач*）と呼ばれる、牧民のなかでも特に競馬に耐え得る馬を調教する技術を備えた人々が育てる。そのオヤチが述べるには、駿馬も、駿馬を親にもち、2歳から6歳くらいまでは、練習を兼ねて競馬をすることはあっても、成長期には長距離を走らせる事なく、距離においても速さにおいてもその能力のピークに達する8歳まで本格的に走らせることはない。

また、競馬の試合が近づくと、馬をつないで自由に草を食べさせないように、食餌制限を行い、贅肉をそぎおとし、引き締まった体を作る。「オヤチ」という言葉は、モンゴル語の「つなぐ（*Ояча=уях*）」という言葉から派生した言葉であることから、馬をつないで食餌制限を行うことが馬の調教には重要であることが伺える。一方ボフにおいても、試合前には、脂肪分の多い肉や油を大量につかった食事、乳製品をとることをボフのきまりとして、厳重に戒められている。試合の前に体を引き締めるのだ。

こうした、ボフの身体と駿馬の体は、人々の認識の上で、非常に近い関係にある。人間の身体部位の名称と、家畜⁴⁾のそれとは全く同じ言葉を使うことから、そのことがいえるのではないだろうか。牧畜という家畜と密接な生活を行うモンゴルにおいて、人間と家畜の身体は時として、重なり合った認識のもとに考えられるのである。

2. 2. 相撲の技～相撲の技と牧畜作業との関連性

モンゴル相撲では、日本の土俵のように競技の領域を規制せず、相手のおでこ、膝あるいは肘を地面に触れさせると勝ちとなる。手のひらは地面についてもよいことになっている。⁵⁾ いわゆる「立ち合い相撲」⁶⁾であるが、その制限時間はない。つまり、日本の相撲のように仕切り線に手をつき、立ち上がるということはなく、お互い向き合って、組み手を争うことから、試合は始まる。

また、服装はゾドグ（*зодог*）と呼ばれるチョッキを着用する。それは長袖で胸が大きく開き、体にぴったりと密着し、おなかのところで紐を結ぶ。また、ショウダグ（*шуудаг*）と呼ばれるパンツをはき、ゴダル（*дугал*）というブーツを着用する。マルガイ（*малгай*）と呼ばれる帽子を被るが、これは試合中はザソール（*засуул*）と呼ばれる介添え人がもつことになっている。

これらのルールや服装の特徴は、当然、身体技術である相撲の「技」に対して、少なからず影響を与えるであろう。モンゴル相撲の特徴である「両手のひらを地面につけてもよい」というルールは、「足の裏をとる」という技、「タウハイダハ（*тавхайдах*）」を可能に

した。足の裏をつかむ手は、地面に触れてしまうことになり、それが許されるからこそ、この技が成り立つ。また両手を地面についた不利な状態から、足で相手の体をはさむという返し技もある。

また、服装の特徴から、『入門・モンゴル国』では、『相手の体・服をつかまないでかける技、相手の手、上衣の袖・端・腹紐をつかんでかける技、上衣の後部、トランクスをつかんで深く組み合せてかける技』⁷⁾の三種に分類して紹介している。この分類のように、モンゴル相撲の場合、ゾドグやショーダグの端をつかむことで、相手を倒すことが多く、その組み手争いが勝負の明暗を分かつのである。

モンゴル相撲の技は、数え方によっては、400種類以上もあるとも言われるが、その分類方法は決まったものがない。現在、最も相撲の技を詳しく述べている文献だと考えられる、『相撲の技』⁸⁾には、その中の54例の基本的な技を取り上げているが、これらを、手の技、足の技、相手が仕掛けてきた技を利用しての返し技、技と技を連続して行う複合技の4種に分類している。この分類は、普遍的なものではないが、その技の名称に関しては、一部例外は見られるものの、かなり共通理解され、一般化されたものである。

その技の名称の特徴をみてみよう。注目する点としては、「トイグ (тойг=膝蓋骨)」「タシャー (ташаа=腰関節)」などという骨格にかかわる単語が名称に多用されているということである。日本の大相撲の技が、「寄り切り」「押し出し」「突き落とし」など、動詞の組み合わせで名称が成り立つものが多いことと比較してみても、身体部位が技の名称に多用されていることが分かる。これは、モンゴルの人々が遊牧生活において、家畜の解体を日常的に経験し、骨格の知識に非常に優れていることにかかわると思われる。また、その技は、モンゴルの遊牧生活と密接なかかわりをもつものと思われる。例えば「トンゴロホ (тонгорох)」という技は、相手の体重を自分の体の腰や肘に一旦乗せ、相手を倒す

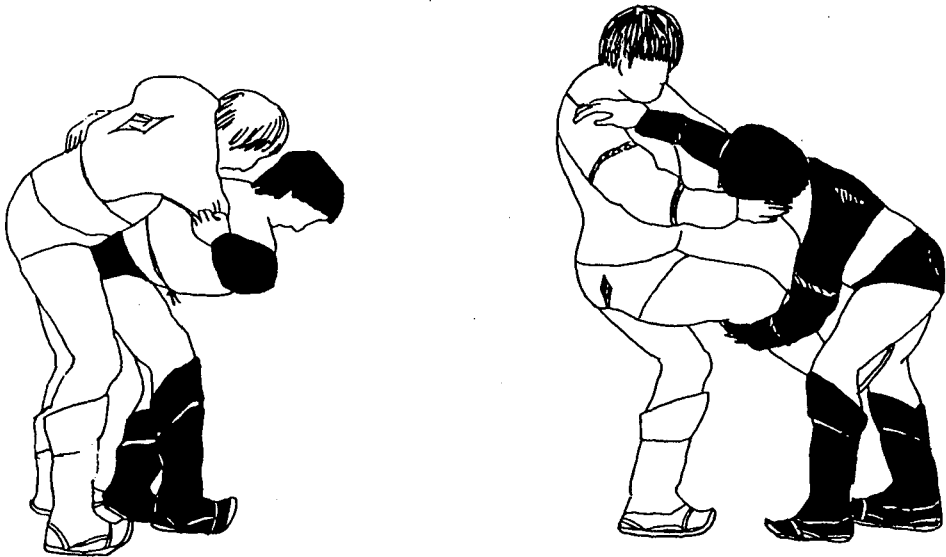


図1. トンゴロホ技(左)とソイラホ技(右)

という技であるが、非乗用馬を乗用馬に調教するときに、馬を倒して轡をはめるときに用いる技だという。また、「ソイラホ (суйлах)」という足を手で取る技は、子どもたちが、戯れで子馬や羊を倒して遊ぶときに同じ動作をするという。

相撲の競技自体は、特に遊牧社会と結び付いたものではない。ひろくほとんどの人類社会に認められるものである。しかし、その身体の動作や技の認識においては、モンゴル社会の独特の特性が映し出されている。こうしてモンゴルにおける相撲の技の体系は、生業を背景とした知識や身体技術に密接に結び付いていると言える。

2.3. ボフの動作と表現

モンゴル相撲の競技としての目的は、「相手の体を地に触れさせる」ということである。こうしたいわゆる技術 (スキル) としての身体動作以外にも、ボフは象徴的な身体表現を行う。それをまとめれば、以下のようになる。

- a. ガラー (гараа) ボフが試合場に入場するときの小走りをこう呼ぶ。試合場は、ウランバートルのナーダムでは、スタジアムで行われたり、地方の相撲大会などでは、草原そのものが試合場となる。冬季になれば体育館などの屋内で行われる。これらいずれの場所においても共通することは、必ずボフは南の方向からガラーをする。これは、モンゴルの民俗方位⁹⁾によるものである。
- b. デウエー (дэвээ) 会場にガラーすると、鳥が羽ばたくように手をゆっくりと上下する。走りながらまたはその場で回りながら羽ばたくことをデウエーという。このデウエーで国旗や幟の回りを回る。トーナメント戦の、3・5・7回戦ではザソール (介添え人) が、ボフをたたえる詩を吟ずるがその際も、ザソールの肩に手を置き、デウエーをする。また、勝負に勝ったときも、国旗の前で、デウエーをする。デウエーは、自然と観客に自分の力を見てもらおうという意味があり、ボフにとってデウエーをするということは、壮快な気分になり、力がみなぎることを意識できるという。
- c. シャワー (шавгаа) 少し腰をかがめ、太ももの内と外を手のひらで打つ。もともと、ラクダが後ろ足を開いて、尾を振って体を打つという意味の動詞シャワフ (шавгах) から派生した言葉である。ボフはこれを内、外、内と3回行うのが普通とされているが、称号の高い力士が2度しか行わない場合は、その後ろにつくボフも2度しかたたいてはならない。モンゴル相撲の世界は、称号の高低によって厳しく行動が制限を受ける。この太ももを打つ行為は、このことが反映したことの事例のひとつである。日常生活のふるまいにおいても、称号の高いボフが手をつけない料理の皿は、他のボフも手をつけてはならないなど、厳格なきまりがある。
- d. 脇の下をくぐる 勝負がつくと、勝敗の勝ち負けにかかわらず、称号の上のボフの脇の下を、称号の低いボフがくぐる。同じ位なら、負けたものがくぐることになる。これは脇をくぐることによって尊敬の念を表している。一方、勝ったボフは、国旗や国家を象徴する幟の前で、デウエーを行う。その間に、負けたボフは、ゾドグの腰紐をほどいて、負けを認める。

前項で述べた相撲の技は、相手の身体を地に触れさせるための技術であるが、ここで述べた身体の動作は、格闘技というスポーツから離れたところにある身体の表現である。この両方を合わせ持って初めて、相撲と言える。ボフ当人は、試合に勝ち進むことと同様に、これらの身体の表現を重要だと考えている。たとえ、試合前の練習であっても、これらの所作は、一つも欠く事なく行われるのである。

これはモンゴルに限ったことではなく、たとえば日本の大相撲においてもシコをふんだり、水をつけることを必ず行うのと同様である。すなわち相撲が、相手との勝負を競うことを唯一の目的とせず、それに伴う身体表現にも重要な意味を見いだすことは、モンゴルと日本の相撲の共通点である。

3. ボフのイメージ

3. 1. ボフの称号

ボフには、ナーダムでの成績に伴って、称号が送られる。毎年、首都ウランバートルにおいて、7月11日と12日の革命記念日に行われるナーダムには、ふつう512人のボフが参加する。トーナメント戦で試合は進められ、5回戦に勝利すれば、ナチン（начин＝ハヤブサ）という称号が与えられる。また、ベスト4に残ればザーン（заан＝象）、1度の優勝でアルスラン（арслан＝獅子）、2度の優勝でアヴラガ（аврага＝巨人）という称号を与えられる。また、3度の優勝でバイン・アヴラガ（байн аврага＝常勝のアヴラガ）、4度の優勝でダライ・アヴラガ（далай аврага＝偉大なるアヴラガ）、5度の優勝でダルハン・アヴラガ（дархан аврага＝神聖なるアヴラガ）となる。これらの称号は、上のランクに格上げされることはあっても、下がるということはない。ボフの着用するマルガイと呼ばれる帽子には、この称号の姿を描いたメダルがつけられる。このナチン、ザーン、アルスラン、アヴラガは、いわゆるモンゴルにおいて、「強さ」を表す象徴である。モンゴルのボフは、日本の大相撲のように四股名を名乗ることはなく、常に本名で通すのだが、称号は常に本名の前につけられる。その象徴は、ボフの姿に重ねられるのである。

また、ボフのイメージは、やはり家畜を初めとする動物たちと重ねられることが多く、それらと共生するモンゴルに特徴的なものと言える。例えば、ファンや新聞、雑誌などのマスコミから名付けられるあだ名もまたそうである。それは、圧倒的に動物に関するものが多い。例えば、アヴラガの称号をもつH・ジャンヤンという名のボフなどは、「種雄ラクダのアヴラガ」と呼ばれている¹⁰⁾。種雄ラクダがさかりの時期を迎えたときのような荒々しい力をもっている、という意味で、一力士の形容に用いている。また、前章でも触れたが、ボフが太ももを手でたたき動作を表す「シャワー」という語は、もともとは、「ラクダが尾で自らの体をたたき」という動詞から派生した言葉である。ボフの身体表現とラクダの日常的な動作を重ね合わせて認識されている。

また、モンゴル国西部のオイラート系の諸集団ではウランバートルで行われる相撲と異なったルールで行っているが、その独自の相撲のことを特に「種牛相撲（бух барилдаан＝ブフ バリルダアン）」と呼んでいる。以上のように常に相撲を行うボフには、力を有する動物の姿と重ね合わせてイメージされることが分かる。

3. 2. 鳥にたとえられるボフ

力をもった動物にたとえられることの多いボフであるが、特に、「鳥」にたとえられることが多い。ボフの称号のひとつにナチン（ハヤブサ）があるが、それと同様大型の鳥とボフの姿が重ねられる。ナーダムにおいては、3回戦、5回戦、7回戦には、ザソール（介添人）が、ボフの出身地や職業、称号やそのボフの相撲の勇壮なさまを、独特のメロディーにのせて吟ずる（これを“ツォル（цол）”という）のであるが、その歌詞にもしばしばボフは鳥にたとえられている。以下の歌詞は、ソソルバランという名の60歳のアルスランの称号をもつボフに対して、1996年のナーダムにおいて歌われた歌詞である。

「東側のザソールよ、聞きたまえ。／ボフを指名しようぞ¹¹⁾／モンゴル帝国建国760周年記念／人民革命の偉大な75周年記念日／全国民が待ちに待ったナーダムの／西側のダゴール・マグナイ¹²⁾／中央県バヤンバラットソム出身／農業大学の教員／モンゴル国のアルスラン／ソソルバランがボフを指名しようぞ！／光彩を放ち／未だ衰えを知らず／素早い身のこなし／力張り／鳥が飛ぶよう／知恵明るく／気力充実／日々向上し／人間のもつ能力をすべて発揮できうる／モンゴル国のアルスラン／ソソルバランであるぞ！／東側に控える軍隊のボフ，エルテンバットを選んで／ナーダムご覧の皆々様の目の前で／全力を尽くし／数々のすばらしい技を競い合い／相撲をとろうではないか！」（下線部筆者）

この歌詞の「鳥が飛ぶよう」というのは、鳥のように軽やかに相撲をとるという意味である。ボフの身のこなしを「鳥」にたとえている。このフレーズは、ソソルバランのみでなく、他のボフにも多用される言い回しである。

この「鳥」というイメージは、称号の名前やツォルにだけ登場するのではない。前述したデウエーが、その鳥そのものの姿を、表現する所作をしているのである。「デウエー」という言葉自体が、モンゴル語で「はばたき」という意味を示している。これまでデウエーは、鷹の羽ばたきであるとか、ハヤブサ、鷲など、大型の鳥の羽ばたきとされてきた。先行研究においても、ほとんどがこのデウエーを「鷹の舞」¹³⁾と訳している。しかし、1996年7月の調査によれば、称号が低く経験の少ないボフは、鷹や鷲などの大型の鳥を表現するデウエーを行うが、称号の高いボフのデウエーは、「ハンガルディー」という想像上の鳥を意識して行うということが分かった。ボフの経験や称号の高低ではばたく鳥の種を変えて意識している。しかし、この「ハンガルディー」は、ここ近年の民主化の波によって、新たに意識し直されたものだという。もちろん、これは社会主義時代にも「デウエー」に「ハンガルディー」のイメージを見なくはなかったが、1991年の民主化以降、この「ハンガルディー」は、特に注目が集まるようになった。次章では、その「ハンガルディー」を詳しく取り上げることにする。

4. ハンガルディーのイメージの復活～「動き」に対する意味付けの変化～

4. 1. モンゴルにおけるハンガルディーの伝承

ハンガルディーは、ガルダ、ガルディ、迦楼羅（かるら）などとも呼ばれ、仏教文化を



ӨДРИЙН ЗҮРХАЙ
Билгийн тооллын 30. Хөх
Бэр өдөр. Нойд, мөр,
хонь, тавьж жигтэй,
алжиг, мөрөг, дөр, түүний
жилтэй болжортой,
явуултай. Өдрийн зурхай
цагуудыг түү, хонь,
хулгай, үзэр болой.
Хөл одоод мөрөө хойш
нь гаргаарай.

1996.5.17. БААСАН ГАРИГ

NO.98,99(1030,1031)

ҮНЭ 100 төг.

ТОРГОН ЗОДГИЙН САДАН, УРАН МЭХИЙН ЭЗЭН-УЛСЫН АРСЛАНГУУД МИНУ

図2. 「ウランバトル新聞」のタイトル部分のハンガルディー

背景とし広く伝承される想像上の鳥である。日本においても、奈良の興福寺の迦楼羅像は有名である。特に東南アジアなどでは、仮面劇に登場したり、ガルーダ・インドネシア航空の名称に採用されたりし、アジア社会に広く伝播している。ハンガルディーとは、インド神話では『火・太陽を神格化したもので、竜を常食とし、鳳凰のように美しく、鳥王¹⁴⁾』とされ、鳥類の王ヴィシュヌの乗り物とされる神鳥である。金色の翼をもち、あたま、くちばし、翼、爪が鷲の形で、人間の身体をもつといわれている。

モンゴルにおけるハンガルディーは、チベット仏教圏でみられる「ヒーモリ」という祈禱旗にみられる。ゲルやアパートの門戸の竿や綱に高く掲げられ、そこには馬やハンガルディーを描く。この「ヒーモリ」においてハンガルディーは、守護の動物とされている。

また、モンゴルでは口頭伝承や英雄叙事詩にも多く登場する。ハンガルディーの羽根の不思議な力によって蘇生する英雄の話や、若者を救うため巨鳥を倒すハンガルディーの姿が描かれている。また、「蛇を食らう」という恐ろしい存在としても登場する。一方で、英雄自身の姿や動作、身のこなしにハンガルディーの例えが用いられることもよくある。とくに、英雄の機敏な動作は「ハンガルディーのはばたき」と形容されるのである。

こうした、仏教文化を背景にもつ象徴であるゆえ、社会主義体制下においてはその姿は国民の目に触れることは少なかった。そもそも、チベット仏教自体が取り締まりされていたのであるから、当然といえる。しかし、1991年の民主化以降、こうした伝統的なハンガルディーが新しい形で、シンボルにまつりあげられることになったのである。「ウランバトル新聞」では、そのタイトル部分にハンガルディーの姿を印刷するようになった。新聞の新しいマスコットとして「ハンガルディー」を採用したのである。すなわち「民主化」のシンボルとして紙面に復活したのである。

4. 2. 相撲とハンガルディー

社会主義が事実上崩壊し、政治における民主化への交替がおこなわれるにつれ、相撲の世界にも、変化が現れている。そのひとつが、ボフが試合前後に鳥の羽ばたきをまねた身振りのデウエーが、「ハンガルディー」をイメージしていることが再認識されたということだ。これまで、鷹や鷲などの大型の鳥のイメージが先行していたが、この数年「ハンガルディー」が注目を集めるようになった。称号が低く、経験も浅いボフのデウエーは、鷹

や鷲を表現するが、特に称号が高くなると、鳥の王・ハンガルディーを表すということが、ここにきて、新たにボフ自身が認識するようになった。それと同時に、ボフの着用するマルガイ（帽子）のメダルに、これまでは相撲をする人物が描かれていたが、民主化以降、ハンガルディーが羽ばたく姿が描かれるようになった。

身体に付与された社会的文化的なイメージは、決してその社会にとって固定されたものではなく、社会の流れとともに時として変化を見せる。社会主義が終焉をむかえ民主化運動が起こり、旧ソ連の枷から解き放たれたモンゴルにおいて、ボフの身体に伝統的なイメージが復活したということは象徴的な出来事である。

デウエーの動作にハンガルディーのイメージを重ね合わせることで、また、マルガイのメダルにハンガルディーが描かれるようになったことから、以下の2つの意味が読み取れるであろう。

ひとつは、ボフ自身の超自然性を強調しているということである。ハヤブサ、鷲、鷹など実際に存在する大型鳥のイメージだけでは、埋めるにあまりあるボフの存在を、「ハンガルディー」を復活させたことで、その特性をより確実なものにしているのである。チンギスハーンを初めとする伝承上の英雄と同じく、現存する英雄に超自然的な力をイメージするのであろう。

もともと、モンゴル相撲はオボーの祭りにおけるナーダムにおいて行われていたのが始まりとされる。「オボー」とは、丘や峠、湖のほとりなどに設けられた小さな塚で、土地神のよりしろでもある。現在も、オボー祭りは雨乞いの祭りとして旧暦の5月に行われている。その折に相撲が行われ、自然界の生きとし生けるものを喜ばせるという。ボフの身体はただ競技をするという目的のみで存在するのではなく、いわば人と自然に対して「見世物」になりうる身体として、その儀礼性を指摘できるであろう。

ボフのような国民的英雄をハンガルディーのイメージで語ることは、むしろ、モンゴルにおいて伝統的なものである。その「伝統的なもの」の復活、これがもう一つの意味となる。相撲を巡る世界において、民主化の波とともに、この伝統的なものを復活させる例は多く見受けられる。例えば、ナーダムにおいては、チンギスハーンが解禁となり、チンギスハーン時代の幟が国旗に変わり掲げられるようになった。また、ナーダム当日の市内パレードにも、チンギスハーン時代を懐かしむように、兵士姿の一行が、1996年から加わるようになった。すなわち、「民族」を色濃く表現するようになったのである。ボフの身体にも、民族的な伝統を積極的に復活させたということである。

5. む す び

本論では、モンゴル国の相撲を取り上げ、まず第一に当該文化のなかのボフの身体について論じてきた。そこでは、ボフとして理想の身体とされる条件とそれのトレーニングの方法、そして、モンゴル相撲独自の技の特徴と、表現的な動作について述べた。また、ボフの身体に付与されるイメージについて述べ、特に「ハンガルディー」というイメージについて考察した。

そのことにより、モンゴル相撲におけるボフの理想的な身体は、遺伝によって得られるものであり、それを生かしたかたちで相撲の技を鍛練する時期は、成長期後が最善である

と考えられ、これは、競馬用の馬を調教する際の方法と類似することが分かった。人間の体と家畜のそれとを密接に関連づけて考える、モンゴルの「からだ」に対する知識の特性の一端が提出できた。

また、ボフの身体技術である「技」の名称は、身体の骨格の名称を多用したものが数多く見受けられ、「技」の動作においても、生業形態の身体技法と関連づけたものが見受けられることを明らかにした。また、競技と直接的には関係しない、相撲における「表現」動作を示し、ボフの身体が儀礼性を備えたものであることを指摘した。

続いてこうしたボフの身体のイメージについて次章で検討した。そのイメージは家畜を初めとする動物の姿に重ねられることが多いが、特に「鳥」はその中でも多用される。ハヤブサや鷹、鷲など大型の鳥の外にも、1991年の民主化以降、「ハンガルディー」という想像上の鳥がそのイメージとして取り上げられることが多くなった。この鳥は、モンゴルにおいて伝統的に英雄の形容に使われるものではあるが、社会主義時代には仏教文化を背景にもつという理由で、存在感の薄いものであった。それが、モンゴルにおいてこの約5年程の間に、このイメージが復活した背景には、ひとつにはボフの「聖なるもの」としての身体が、超自然的なイメージを再び想起させたということがいえる。モンゴル相撲の歴史をたどると、もともとは、オポーの祭りがはじまりとされているが、オポーと呼ばれる小さな塚に祀るというもので、現在では雨乞いの祭りとして伝承されている。そのオポーの祭りに、相撲が奉納され、自然界の生きとし生けるものを喜ばせたという。そうした力がボフには備わっていると考えられたのである。そうした「自然を喜ばせる」という特別な力をもつボフには、自然界の大型の鳥のイメージを越えたものが、イメージとして必要であったとしても不思議ではない。称号の高いボフの経験を積んだ技や身のこなしは、想像上の鳥の王、ハンガルディーの姿に重なったのである。

一方で、今現在のモンゴル人のおかれている心性を、ボフの身体に象徴したといえる。社会主義時代には抑圧せざるをえなかった、民族的で伝統的な文化の基層にあったものが表出したものである。これらのことより、モンゴルの文化におけるボフの身体は、すなわち「超自然」な存在であり、なおかつ、その身体がおかれている当該社会の波によって塗り替えられうる存在であることが分かった。

今後の課題としては、モンゴルの文化におけるボフの身体に対する理解を深めるために、ボフの動作の比較研究が必要であろう。技および儀礼的な所作を、他の地域の格闘技や身体運動との比較を行うことによって、よりモンゴル相撲のボフの身体性が明らかになるものと思われる。また同時に、モンゴル国内において少数民族が独自の相撲を行っているという情報があるが、未だフィールドワークが実現していない地域が多い。これらが明らかにされることによって、ハンガルディーをボフの身体イメージに復活させた社会的背景がより明確にされることと考えられる。これらは、今後の課題として別稿にゆずる事とする。

註および引用文献

- 1) 野村雅一『しぐさの世界——身体表現の民族学』、日本放送協会、1983年。
- 2) 菅原和孝『身体の人類学』、河出書房新社、1993年。

モンゴル相撲の基層をなす「身体」イメージの復活

- 3) 1996年6月29日から7月10日までの間に、3度にわたり、20名の現役ボフにインタビューを行った。調査地は、ウランバートルおよび、ウランバートル郊外のハルツタイである。いずれも、ナーダム（モンゴルの相撲・競馬・弓射の競技会）前の練習中に行った。
- 4) モンゴルにおいて家畜とは、ラクダ、牛、馬、羊、ヤギのことを指す。
- 5) これは、モンゴル国の70%以上を占めるハルハ族のルールである。国規模の大会になると、共通ルールとして採用される。
- 6) 例えば、韓国のシルムのように組み合った状態から始めるのではなく、組み手争いを行う相撲である。
- 7) 小野繁樹「競技」、青木信治・橋本勝編『入門・モンゴル国』、平原社、1992年、p.155。
- 8) T. エルデネ『相撲の技』、ウランバートル、1992年（Г. Эрдэнэ “Барилдах Ур”, Улаанбаатар, 1992）。
- 9) モンゴルの民俗方位を説明するためには、彼らの住居であるゲル（天幕式住居）を引き合いに出すのが分かりやすい。ゲルの入り口は、南東を向き、それをモンゴルでは「南」もしくは「前」とみなす。入り口と反対側、すなわち、モンゴルでの「北」は、尊い方角とされている。モンゴル相撲においても、ボフの出入りは「南」、来賓席は「北」に位置する。相撲スタジアムもそれに合わせて建設されている。
- 10) Ц. Гэлэгжамц『雄ラクダのアヴラガ』、アルハンガイ、1993年（Ц. Гэлэгжамц “Буур Аварга”, Архангай, 1993）。
- 11) ナーダムの3回戦からは、称号の高いボフが自分の相手を指名できる制度がある。
- 12) ボフ達は、西側と東側の2列に整列するのであるが、その西側の中で3番目に高い称号をもっているという意味。
- 13) 『モンゴルのスポーツ』、ベースボール・マガジン社、1988年。
- 14) 古田紹欽他編『仏教大事典』、小学館、1988年、第1版第3刷。

参考文献

- 原山煌『モンゴルの神話・伝説』、東方書店、1995年。
- 川田順造「身技技法の技術的側面」、鈴木二郎・石川栄吉監修『社会人類学年報』14、弘文社、1988年。
- 井上俊他編『身体と間身体の社会学』、岩波書店、1996年。
- P. ゴリグ『モンゴル国のスポーツ』、ウランバートル、1959年（P. Зориг “Монгол Ардын Спорт”, Улаанбаатар, 1959）。